

《Parabolic Garden ROBO》について

楠本 愛 (国立国際美術館研究補佐員)

荒涼とした砂漠のただなか、植物で覆われたパラボラアンテナを機械の部品のような胴体と二本の脚が支えている。足はないか、砂に隠されていて見えない。しなう植物と雲の流れる形から、わずかに風が吹いていることが分かる。

國府理が《Parabolic Garden ROBO》(2013) (以下《ROBO》という)のために描いたドローイングはおおよそこのようなものである。本作品は西宮市大谷記念美術館での個展に際して制作され、そこでは《ROBO Whale》(2008-09)と差し向かいで展示された。両作にはいくつかの共通点がある。まず、ビートルの通称で知られるフォルクスワーゲンタイプ1という車種の自動車のパーツが、いずれの作品にも素材として取り入れられている。《ROBO Whale》では特徴的な丸みのあるボンネットがクジラの頭部に、車体のフレームの一部が扇骨に用いられ、エンジンが背に載せられた。他方《ROBO》ではトランスミッションケースから胴体が、フレームの別の部分から脚部がつくられている。これらのパーツは作家自ら解体した1台の自動車から取り出されており、この点で双方は言わば兄弟のような関係にある。そして國府の全作品のなかでも、特に空想的な世界観が際立っているのがこの二作である。実際には《ROBO Whale》のプロペラは誰かがエンジンをかけないかぎり回り出さないし、《ROBO》は容易に動かすことができない。だが、西宮で発表されたドローイングでは、それらはひとりでに宙を泳ぎ、砂漠を歩いているように見える。それは「ROBO」という作品名が示すもの、すなわちロボットというより、自由な意識をもった生き物を想像させる。

また、《ROBO》には國府の姿が投影されている。なすすべの手蔓さえ見つけられない自らの状況を電波がうまく送受信できないパラボラアンテナに重ね合わせ、通信障害の原因を生い茂った植物に帰することによって、手に負えない問題でも肯定的に引き受けようとしたのだという。²あるいは、植物を載せながら「良い報せ」が受信できるように移動するアンテナのモチーフは、問題の実体が自分の目では見えないというはがゆさを抱えながら「ここではないどこか」に向け、どうにか歩みを踏み出そうとする人びとに対しての作家からの励ましであるとも考えられる。無機質な機械が人間のように表現されること、わたしたちと同じような身体構造をもたないにもかかわらず「人らしさ」が感じられること、こうした《ROBO》の特徴は國府のイメージの源泉にあ

る、マシン(機械/自動車)への並々ならぬ愛着と無関係ではない。國府が幼少期から自動車を始めとする工業製品に憧れを抱いてきたことはよく知られている。憧憬は少年時代には新聞折込広告や答案用紙の裏への落書きという形で昇華され、そのなかで國府は鋭い観察力と端正な筆致を体得していったのだろう。以後、大学の彫刻科に籍を置き、構想を三次元の物体として具現化させるための身体感覚を研きつつ、作品のメカニカルな部分までを設計、制作できる機械工学の知識と技巧を独自に深めていった。

これまで國府の作品とマシンとの関わりは、流線形や放物曲面という作品が具える造形的な魅力や実際に動き、乗れるという機能面から主に語られてきた。だが、國府の作品とマシンが分ち難くむすびついているのは、制作の始原というべき自己観照の過程で自らを映し出す「鏡」としてのマシンが常に介在していたからではないか。人間とまったく別のメカニズムを通して自らの背後にある世界を見つめることによって、自分の視点と別の視点との差異を測定する。國府は、この視差から立ち現われる立体的な「もうひとつの世界」、内なる世界を作品として形にしてきた。³《ROBO》もまた例外ではなく、不毛の地における機械と植物と生き物の中間的なものありかたが、わたしたちにも共有可能なモデルとして提示されている。そうであるなら、今度はわたしたちが考えなくてはならないだろう。國府が遺した類まれなモデルの数々を参照し、これまでとは別の、新たな生成/実在の条件を探し求めよう。この先の世界も、わたしたちの進化の行方も、ほんの少しもゆるがせにしないために。

1. 國府は自作のドローイングについて次のように述べている。「僕のドローイングには2種類あって、作品プランを分かりやすく説明するための解説図のようなものと、もうひとつは、作品を展示するだけでは実現し得なかった不十分なことや世界観の補足のために描いているものがあります。」(國府理『國府理 作品集』2011年、アートコートギャラリー、24頁)
2. 西宮市大谷記念美術館編『國府理 未来のいえ』2013年、27頁
3. 國府は、どういうときに新しい作品を思いつくのかという筆者の質問に、たいてい車の運転中だと応えたことがある。フロントガラスにきりとられた風景が映画のように見えて、別の世界のなかで走っているように感じるのだという。車の運転は、人間とマシンが一体化する典型的な例である。